

月刊

昭和52年12月5日第1号刊行 ISSN0386-2283  
平成18年4月1日発行 第30巻第4号通巻第343号

国立民族学博物館  
2006

4



特集 育てる



# アモック的無差別殺人

野田 正彰

のだ まさあき / 1944年高知県生まれ。北海道大学医学部精神病理学専攻卒業。関西学院大学教授。精神科医、評論家、ノンフィクション作家。専攻は、比較文化精神医学、文化人類学。医学博士。著書多数。

文明、都市化、さらに情報化が進むと、古い非合理的思考は消滅していくと信じられてきた。だがこれも、「迷信の消滅」という迷信のようだった。

感応精神病(二人での精神病)も無くなっていない。その日本の特殊型としての祈禱性精神病は、家祈禱がほとんどおこなわれなくなったので少なくなった。しかし、都市の孤立した家族のなかで優位な者の被害―誇大妄想が、その者に精神的に依存する他の家族に感応していく現象はしばしば見られる。近隣とすべての交際を断ち、家族で餓死していく事件などは、都市化のなかでの感応精神病ではないかと疑われる。

アモックも増えているように思える。これからも増えていくのではないだろうか。マレー語のAmogは、「決死の戦士Amucoに由来する言葉であり、シユテハン・ツヴァイク(オーストリアの作家)の『アモック』や、サマセット・モーム(イギリスの作家)の『雨』などの短編小説によって知っている方もおられるであろう。

アモックは狭い村落共同体の生活のなかで、何らかの侮蔑を受けたと感じた者が、抑うつ状態となって村落の外の茂みに数日間うすくまり、その後、突然、武器をもって村人を無差別に襲うのである。殺

されずに取り抑えられると、「なにか変な気分になった、なにか起こったの分からない」と健忘を訴える。村人は体面を傷つけられたとき、このような狂気の型を選びえることを見聞きしており、彼(彼女)はその知識に基づいて興奮する。それ故に「文化結合精神病」とされてきた。精神医学的の症状診断では、人格解離を伴う急性反応精神病ということになる。

ところが近年の日本やアメリカ、西欧諸国で、アモック的無差別殺人事件がときどき報道される。一九九九年九月、JR下関駅に、三五歳の男がレンタカーで突っ込み、さらに包丁で通行人に切りつけ、三人を殺害し、二人を傷害した。大阪池田市における小学校乱入事件もアモック的だった。犯人はさまざまに精神病であったり、または正常であったりするが、殺人プロセスはアモック現象である。自分は社会から弾かれていると敏感に感じ、どうせつまらない敗者の人生なら終わりにしよう、自分が死ぬのなら、この社会も無くなればよい、と考える。情報化によって、彼が対象とする社会は共同体ではなくなり、不公平な情報社会全体となっている。しかも差別抑圧と絶望と大衆への復習は、情報化によって学習されている。文化人類学者と精神病理学者が共同研究すべき領域だろう。



## 目次

APRIL 2006  
月刊みんぱく

4

01 エッセイ 世界へ世界から  
アモック的無差別殺人  
野田 正彰

02 特集  
育てる

社会で子育てする仕組み  
野村 厚志  
「母性」に近づく父親たち  
木村 原子  
マルチメディア時代の子育て  
目黒 強

モンゴルに見る未来の育児 小長谷 有紀  
イランの「子どもの居場所」 森田 豊子  
東北タイの「孫育て」 木曾 恵子  
教育熱心なコリアン一世 金 美蘭

08 未来へむかむミュージアム  
広場としてのミュージアム  
川口 幸也

11 表紙モノ語り  
バイユートのゆりかご  
池谷 和信

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
津波が残した亀裂  
小河 久志

15 時論・新論・理想論  
建築家の悲劇―アラブ世界の都市伝説  
福田 義昭

16 外国人として生きる  
ベトナム語の架け橋として  
庄司 博史

18 みんなを離れるにあたって  
民族学から観光文学へ  
石森 秀三

19 地域研究企画交流センターの  
組織再編にあたって  
押川 文子

20 生きもの博物誌  
ヒトとチンパンジーの差は  
数パーセント  
山越 晋

22 フィールドで考える  
グトゥの夜に  
大川 謙作

24 特別展  
「みんぱくキッズワールド」  
次号予告・編集後記



# 特集

# 育てる

伝統が薄れ、生活様式も多様化した今日、子育ての風景は変わってきている。

女性の社会進出、メディアの進出、出稼ぎ、移住などの社会変容にともない、子どもと大人の結びつきには、

伝統や従来の理想にしばられない柔軟性が求められる時代である。

特別展「みんなくキッズワールド」の開催を機に、

アジア諸国の最新育児事情を見ながら、

社会のなかでの子育てのあり方について考えてみる。



シリア アフリン地方



中国 雲南省



## 社会で 子育てする 仕組み

野林 厚志

(のばやし あつし)

文化資源研究センター

### 社会のなかで子は育つ

今回の特集は「育てる」というテーマで、特に「子どもを育てる」ということを考えてみたい。「育てる」という言葉のもつ意味は多様であり、その対象はもちろん子どもだけではない。部下や後輩を育てることもあれば、人間の集合体である組織を育てるといったこともある。大や豚といったペットや家畜、花や稲のような植物はもちろんのこと、ときには「愛を育てる」といった具合に、無体物に用いられることもある。対象が異なれば、育てられる目的は異なる。共通しているのは、育てる対象になんらかの思いを育てる側が抱いているということだろう。

かつて機能していた社会の伝統のなかには、子どもの健やかな成長を保証するためのさまざまな考え方や理想、

それらを実現するための社会的な仕組みとしての通過儀礼などが存在してきた。また、それぞれの地域社会のなかで結ばれる子どもと大人との関係は、子どもが成長していくための大切な条件となってきた。例えば、中国の漢族社会では通常、子どもは父方の家に属することになるが、成長に伴う儀礼活動を盛大におこなう役割は母方の親族にあり、子どもの経済的、社会的な後ろ盾となってきた。また、イヌイト社会では、親以外に「儀礼的助産人」という世話人の存在が、子どもが成長していく過程において物心両面において支えとなってきた。ミクロネシアにしばしば見られる母系社会においては、子どもにとって、母方のオジが大切なことを相談する相手であり、その役割はじつは父親よりもはるかに大きいものとなってきた。こうした現象を見ていくと、子どもを育てるのは親だけではないということがわかる。子どもをとりまく社会のなかに子どもを育てるための仕組みが存在してきたのである。

### 子どもの影が薄い

近代以降の国民国家の出現や経済活動の国際化は、子どもをとりまく環境を変化させ、子どもを育てるという行為に変化を与えてきた。それ以上に、現代社会における地球規模での情報

の流通は、子どもを育てるといふ行為に影響を与えてきた。とりわけ、日本の社会では、社会のなかでの子育てという意識が薄れ、親自身が少ない数の子どもを育てるといふ少子化の傾向が強まり、さらには子育てマニュアルなどに子育ての具体例を学ぶ親や教師が増えている。こうした現象は、親と子どもとのあいだに、より親密な関係を築き、密度の濃い子育てを保証するかのように見える。一方で、社会のなかで、ともに子育てをおこなうという意識が逆に希薄なものとなっていく。子育ての真つ最中の家族が入居するようなマンションを、簡単に倒壊するように設計してしまうような行為や、子どもの安全を守るための特別な措置といったことが国会で議論されること自体が社会のなかでの子どもの不在を浮き彫りにしているといえるだろう。

これから、ますます子どもをとりまく環境は変化していくであろう。子育ての様子が変わっていくだろう。変わらないのは、子どもを育てるのは大人だということである。子どもが健やかに育つてほしいと願う気持ちを育てる側が抱いていれば、親であっても親以外の人間であっても、子どもにとっては幸せなことであろう。子どもを育てることに対する価値感を社会的ななかで共有できればこそ、子どもは健やかに育っていくのである。





## 「母性」に近づく父親たち

木村 涼子

(ぎむら りょうこ)

大阪大学大学院助教授

人間とはつくづく不思議な生き物である。妊娠し、出産することができるとは、そのための生殖器官を備えた女性だけが、われわれの社会において、女性が経験する妊娠・出産体験に接近したいと考える男性は決して「ずいしくない」。

各地で開催されている親子教室や子育て講座などには、「パパも妊婦疑似体験」といった催しが組み込まれていることが多い。約10キログラムの重さがある妊婦疑似体験グッズを装着して、妊娠している妻の状態を感覚的にも把握しようとするパパの姿は、現代的なほほえましい光景といえる。あるいは、妻の手をぎぎぎぎ「ヒーヒー」の呼吸法を唱和し、出産の一部始終を妻と共有しようとする夫の姿はマスメディアなどでもおなじみのものだ。

男性はそもそも妊娠も出産もしない。雌雄異体の生物のなかで、体験の共有を目的としてオスがメスの生殖活動を疑似体験しようとする種は、唯一人類だけといえるだろう。このような、身体や本能の拘束を乗り越える行動をとるところが、人間という生物の特殊性であり、それが人間の文化の源泉である。人間が発展させてきた子産み・子育てにまつわる文化は、多様で豊富だ。それは、「男」とはなにか、「女」とはなにかをめぐる社会的・文化的な約束事(ジエンダー)と深くかかわっている。

歴史学の進展により、子育てを女性(母親)にしかできない営みとする考え方は近代になって構築されたことが明らかにされつつある。子どもを産む性である女性には、先天的に母性愛が備わっており、女性であれば子どもをもちたい、産みたい、いづくしみ育てたいと考えるのは自然の摂理である。母性愛本能をもつ女性が家庭で子育てに専念してこそ、子どもは「健全に」育つ。そういった考え方は、産業化を背景とした近代家族の誕生とともに生まれ、強化されていった。

戦後日本においては、「男は仕事、女は家庭」という性別分業が一般化するとともに、「三歳までは母の手で」といった言説が広がることによって、乳幼児期に子育てに専念する母親は増加していった。高度経済成長期には子どもを中心とした家庭文化が花開く一方で、子育て中の母親の社会的な孤立化という問題が生じた。「密室の子育て」状況が、育児ノイローゼや児童虐待などを引き起こす原因として注目されるようになったのは、一九八〇年代以降のことである。

現在、子育てを女性(母親)だけの責任とする考え方は時代遅れのものとなりつつある。冒頭で挙げたように、子産み・子育てにもっとかかわろうとする父親は増えているし、保育現場では男性保育士の導入が定着しはじめている。

## マルチメディア時代の子育て

目黒 強

(めくろ つよし)

神戸大学発達科学部専任講師

児科学会が二〇〇四年に相次いで、テレビ・ビデオ視聴が乳幼児の言語発達に及ぼす悪影響を指摘したが、日本小児神経学会によれば、時期尚早の見解であったようだ。マルチメディアが子どもに及ぼす影響についての研究は途上にあるといえる。だが、子どもをとりまく、急速に変容を遂げるメディア環境に対する潜在的な社会不安が、メディア有言論の形成を促していると思われる。

子育て不安が高まりを見せる現在、藤野恵美「ゲームの魔法」(アリス館、二〇〇五年)はマルチメディア時代の子育てを考える上でのヒントを提供してくれる。小学六年生の女の子がアトピーの検査入院中に長期入院患者である同年の女の子の存在を知るのだが、面会謝絶のため、会うことがままならない。院内学級で教える女性の援助もあり、二人はオンラインゲームを通して交流を深めていくことになる。子どもに寄り添いながら、子どものメディア体験を理解を示している作者の姿勢が印象的な作品である。

ところで、本書はオンラインゲームをミヒャエル・エンデの「はてしない物語」になぞらえている。はてしない物語は、本好きで空想癖のある男の子が古本屋で万引きした同名の小説を読み進めていくうちに、書物のなかの物語世界に入り込んで、ファンタジーエンという国を救うべく行動する

作品だ。虚構世界を生きるという物語体験において小説とオンラインゲームに変わりはないはずだが、「はてしない物語」を読むことを奨励し、オンラインゲームをプレイすることを規制したいと思うのが子育て中の保護者の本音であろう。しかしながら、小説がニューメディアであった一八九〇年代、現在のテレビゲームと同じように、小説が人々の不安を掻き立てていたことが知られている。

『小説』に「新聞雑誌書籍」を「テレビゲーム」に置き換えれば、テレビゲーム有書論として流用できそうである興味深い文章である。「ゲームの魔法」を読んで、子どものメディア接触を性急に規制する前に、子どもとともにマルチメディアとの付き合い方を模索できる親子関係を築きたいものだ、と二児の父親として思った。

### ゲームの魔法





## 東北タイの「孫育て」

木曾 恵子

(きそ けいこ)

京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



木に布をくりつけた籠り籠で孫を寝かせつけながら、もう一人の孫の相手をする祖母(タイ国マハーサラカム県の農村)

朝九時、寺院内にある村の保育所では、孫を連れてやってくるおばあちゃん姿をよく見かける。東北タイの農村では、若い夫婦が我が子を祖父母に預けて、首都バンコク周辺に働きに出ている世帯が多いからだ。すなわち「子育て」ではなく「孫育て」である。通常、子育てを全うした高齢女性は、寺院での持戒行に参加するなど自らの仏教的な生活世界を築いていくことが多い。しかし、「孫育て」をする女性は持戒行にも参加せず、働きに出ている母親の代わりに再び毎日育児に明け暮れている。

村で「孫育て」が増加するのは、女性の出稼ぎが一般化しはじめた一九八〇年代後半以降。気候条件により収穫が左右される天水稲作を生業とする村では、近隣に労働市場が存在せず、現金収入の機会が極めて限られている。その結果、バンコク周辺都市へ働きに出る者が後を絶たない。

出稼ぎといえは男性の仕事であった時代を経て、一九七〇年代後半から、世帯の維持という役割を付与されていた女性たちが出稼ぎに出はじめた。当初は、規範に反するものとして陰口を叩かれた。しかし、次第に女性が働きに出ることは親を助け、子を養育するひとつの手段として、村人に認識されていったのである。

さて、四月はタイ正月の時期だ。バンコクで働く人びとにとって、長期休暇がとれる数少ないチャンス。両親たちは帰省ラッシュで混み合うバスに乗って、こそっとバンコクから子どもたちと会いにくる。

## モンゴルに見る未来の育児

小長谷 有紀

(こながや ゆき)

研究戦略センター



草原でホテルを経営する妻に代わって、男が赤ん坊の面倒を見る

モンゴルではかつて子どもが生まれると、できるだけ悪い名前をつけていた。「名無し」「これだな」「悪い犬」「くそつたれ」といった名前にしておくことにより、邪悪なものに狙われることを防ぐこととする。また「良い子」と褒めずに「悪い子」と連発して愛でる。乳児死亡率が高かった時代、社会全体で乳児を死神の標的にしないよ

う心がけられてきたのだ。日本では近代化の過程で、企業戦士として働く男と銃後の守りを果たす女という図式によって育児はもっぱら女の仕事とされた。時代はとうに変わって、保育の世界でもかかわらず、今もなお、保育の世界では慣性の法則が働いているように思われる。公的な保育施設を利用するには「保育に欠ける理由」を届け出なければならぬ。例え、共働きの家庭なら、家庭における女性の不在を「欠ける」状況として証明書付で申し出なければならぬのである。これに対してモンゴルの場合、近代化は社会主義のもと、男女共同参画の理想とともに推進されたこともあって育児を必ずしも女性だけに託そうとはしてこなかった。

子どもの名前もはや美辞麗句となり、子どもの命を守るためには医療に頼る時代になっている。ただし、近年の急激な市場経済化によって、病院に行ける人と行けない人の差が未曾有の勢いで拡大する。ますます育児は女だけに任せられなくなっている。と、このように、ビジネスの才覚はそもそも性差に対応しているわけではないから、性にかかわらず、能力や好みの違いに応じて社会進出がさかんであり、一方の育児は、広範囲の親戚や知人らによって人生の喜びの一部として分かち合いにより実行されているからである。

古きよき共同体が昔ながらに存在しているのではなく、未来の育児の姿をここに見出すことができよう。

## 特集 育てる

## 教育熱心なコリアン二世

金 美善

(キム ミソン)

国立民族学博物館外来研究員



ロサンジェルス・ブレスクールに通うコリアンの子どもの発表会

外国で子育てをする親は、さまざまに「異なること」とまどう。妊娠から出産、育児はもろろん、教育まで、子育てで全般で自分が育った環境から常識と予想と期待をリセットしなければならぬ。韓国人の親は、なにより子どもの教育に熱心である。これは子どもによい教育を受けさせて、立派な人になってほしいという、親のモチ

一方こうした子育てに対する親の期待は、外国生活のとまどいを解消するための生活戦略でもある。子どもはホスト社会と親の文化との交流を図る立派な論議となる。とりわけ、ホスト社会から学んだ文化や制度を家庭に持ち運んで伝え、ホスト社会の窓口になるのである。親にとっては立派な日本語の先生にだっとなるのだ。

日本では生活する朝鮮半島の出身者は、歴史的に戦前から住み続けてきた旧植民地出身者やその子孫が構成するオールドカマーと、一九八〇年代後半に韓国の海外旅行自由化によって来日したニューカマーに大別できる。来日事情は異なるが、学校経験の乏しいオールドカマー二世の母親たちが一番力を入れたのも二世の学校教育であった。今日、在日コリアンが日本社会で同様の能力を発揮できるのはいうまでもなく、貧しい生活費を削って子どもの教育費を惜しまなかった一世の熱心な教育のおかげであろう。学校が終わると、塾通いや習いごとで子どもの一日は長い。子どもへの教育費に生活費を削るはニューカマーコリアンも変わらない。

当たり前に素朴な願望からくるものである。これは文化や制度が異なる異国の環境におかれても変わらない。むしろ、移住先の国では、主流社会に子どもを参入させようとする願望が増し子どもへの教育に「層必死」になる。アメリカで二〇〇万人に達するコリアンが模範マイノリティとして評価されたりするのにも二世への熱心な教育が根底にあるとされる。

家庭と職場が全く切り離され、効率最優先の日本の職場ではまず考えられないことであろう。日本の社会にはあまり見られることのない「子どもたちの居場所」がイランにはまだあるような気がする。

## アジアの子育て

## イランの「子どもの居場所」

森田 豊子

(もりた とよこ)

大阪外国語大学非常勤講師



イランの私立幼稚園での授業風景

ここでは子どもが愛されている。イランにいとそう感じている。子どもを連れていくと見知らぬ人がお菓子を持って来たりする。親戚などとの行き来が多いためか、どんな人でも例外なく子どもを扱い方を心得ている。首都テヘランなど都会の小学校では子どもが一人で通学することはほと

んどない。親が送り迎えをするか、セルビスとよばれる月極の乗り合いタクシーやミニバスの運転手と契約して車で送迎してもらえよう。手配するのが普通である。朝霧のなか自宅の門前で車を待つ親子の姿が見られたりする。帰宅時には小学校周辺はセルビスの車とそれに乗る子どもたちで大混雑となる。その時間帯はテヘラン名物の交通渋滞はさらにひどくなる。自宅に直行する子どももいる。親の職場へ向かう子どももいる。

イスラーム革命後の男女隔離政策によって、小学校から男女別学になるなど社会生活において男性しか入れないところ、女性しか入れないところの区別が厳しくなった。その結果、女性しか入れないところでは女性が働くことになったため、女性の職場が増えることになった。近年では家族化が進み、離婚率も増えている。学童保育制度のないイランでは職場で職員の子どもが遊んでいることはめずらしくないし、常に大人の誰かが子どもを見ているように気を配る余裕がある。裁判所のドキュメンタリー映画にも学校が終わって母親の職場に来ている子ども姿がある。いかめしい裁判官がその子に優しく話しかけるシーンが印象的である。

子どもが一人て通学することはほと



過去から現代へ、現代から未来へ。  
今、世界のミュージアムが大きく変わろうとしている。  
一方的な伝授の場から、ともに考え語らう場へ。  
スウェーデンとタイにあるふたつの博物館から  
新しいミュージアムのあり方を考えてみよう。

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)  
文化資源研究センター



通称「スペイン階段」

ミュージアムの素性が話題になるとき、しばしば引き合いに出される話だが、ミュージアム(museum)という言葉のおおもとにはギリシア語のムセイオン(Mouseion)であり、その意味するところは「ムネズ(Muse)」、つまり学問と芸術をつかさどる女神たちのおわします神殿であるという。

ミュージアムの語源

けれども、もしかしたら、museumやMuseumという言葉は、Muserという古語の記憶とどこかでたがいに響きあっているのではないかと。正直にいうと、少し前から、世界各地のさまざまなミュージアムを訪ね歩くうちに、私の中でそのような思いが少しずつ芽生え始めている。

ともに考え語り合う場

今年初め、私は、スウェーデン第二の都市イエテボリにある世界文化博物館を訪ねる機会を得た。同博物館は、二一世紀の新しいミュージアム像を提示する博物館として世界の耳目を集めている博物館のひとつである。

二〇〇四年二月にオープンした同館では、あらゆる博物館像を模索した結果、従来の博物館がとすれば過去ばかり目を向けて、必ずしも同時代の世界と向き合っていないという経緯を踏まえて、既存の学問領域にとらわれずに今この問題を採り上げるという方針を掲げた。このため、移民や麻薬、エイズ、犯罪、失業、宗教間の軋轢といった、これまでの博物館では傍流の扱いに留まっていた「カレント・イシュー」(現代の問題)が、ここでは展示などを通して正面きって扱われることになったのである。

いまでもなく、これらの問題には明確な答えはない。したがって、そうした方針の基本にあるのは、一言でい



スウェーデン/  
イエテボリの  
世界文化博物館



世界文化博物館(イエテボリ)の全景  
(2点とも撮影は林 勲男)

フランス語でミュージアムに当たる言葉は museum だが、同じフランス語には Muser という古語(動詞)があつて、こちらは「無為に時間を過ごす」という意味になる。もちろん、辞書によれば museum の語源もギリシア語のムセイオンに行きつくとあり、Muser という古語との関係を窺わせる記述は見当たらない。つまり言葉の系列としては、Muser の方は amuser (楽しむ) を経て amusement (娯楽) へとつながっている。

かつてのミュージアムのように、来館者に対して一方的に何かを教えようとするのではなく、世界が共有する出口のない問題を採り上げて、ともに考えようという姿勢である。

たまさか私が訪ねたときは、「地平線—アフリカの声」というアフリカの現在に焦点を合わせた展示と、南米オリノコ川流域に住む人びとの文化を紹介する展示、それにグローバルゼーションの一面としてのエイズをテーマとする展示がおこなわれていたが、いずれも、内容の切り口と展示手法の両面において意欲的な取り組みであった。

同館はまた、隣接するイエテボリ大学に、展示空間を実践的な授業の場として積極的に開放し、一方で独自に大学院修士課程にあたる国際博物館学コースを設けるなど、教育面でも前向きな施策を打ち出している。

しかしながら、今回、私がもっとも注目したのは、そんな展示活動や運営面での新しい試みもさることながら、場としての世界文化博物館が、多くの来館者に実際にどのように利用されているのか、ということであった。

担当者から説明を受けた翌日の昼過ぎ、普通の来館者の視線で確かめてみたいと思ひ、あらためて一般の入り口から同館に足を踏み入れてみた。すると、入り口のフロアからいきなり幅二〇メートル以上もある木の階段が、二階へ向かってまっすく伸びていて、その壁の目に飛び込んできた。天井と奥の壁



## パイユートのゆりかご

特別展「みんなくキッズワールド」出展作品  
ゆりかご(標本番号H83428、高さ/25.7cm 幅/36.3cm 奥行/69.5cm)

池谷 和信 (いけや かずのぶ)

民族社会研究部

これは、アメリカ西部の内陸部に暮らすパイユートの子守歌で、「ゆりかごのうた」とよばれる。パイユートは、大盆地の砂漠地帯で狩猟や採集で生計をたて、移動生活を送ってきたインディアンである。彼らが馬を利用してきつくなったのは一六世紀にスペイン人がやってきてからである。一九世紀前半には、毛皮交易にきたヨーロッパ人から、ガラスヒースを入手した。一九世紀後半には数多くの

くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん  
くうー あ くうー 小さなハトさん

軍隊駐屯地などがつくられ、急激な生活変化を経験した。彼らのゆりかごは、ユニークである。赤ん



坊の頭をおおうフードには、細い木で作ったカパーがつけられ、体を皮製のひもでしばるようになっている。しかも、カパーにジグザ

グに入った赤色の刺繍は女の子用のゆりかごを示し、それがないのが男の子用である。さらに、装飾にはみず色を基調とするビーズ細工がほどこされていて芸術的でもある。一九世紀のゆりかごには、白色を中心としたガラスビーズで板の面をうめつくしたものもあるが、現代ではプラスチック製のビーズを線状に並べて簡略化している。かつてパイユートの社会に馬が導入されると、移動の方法が大きく変わった。馬の脇腹に二本の丸太がくりつけられ、そこに荷物のほかにも赤ん坊を入れたゆりかごをしばるのである。一九世紀の終わりに移動生活が終わると、子どもを運搬するゆりかごは使われなくなつた。しかし、一九八〇年頃になると、かつてのパイユートの暮らしを復元するためにゆりかごがつくられるようになった。

豊かな役割を担っているのだ。スウェーデンの世界文化博物館とタイの小さな漁村の地域博物館。一見なんの脈絡もなく、見た目もまったく異なるふたつの博物館は、しかしある一点で奇妙な一致を示しているように思えた。それは、ただ飲んだり食べたり、談笑したりしている以外に何もせず、そこにいるだけの人をもやさしく迎え入れて居場所を提供してくれる、少なくともそのように見える、という点である。仮にそうだとしたら、museumの語源の一部がmusei(無為に時間を過ごす)であった

## ふたつの博物館の共通点

帰りがけに、私はつい今しがた目にしたスペイン階段の光景を反芻しながら、昨年夏にタイを訪れた際に、首都バ

は巨大なガラスで覆われているため、それは溢れかえる外光に包まれて、まるで天国にいたる階段のように見える。階段は通称スペイン階段とよばれているらしい。映画「ローマの休日」に出てきたあの名物階段だ。そのスペイン階段に、老若男女の来館者たちが思い思いに腰を下ろし、あるいは語らいにふけり、あるいは飲食に興じているのである。

階段を上がり切ったフロアはかなり広いオープン・カフェとレストランになっていて、来館者はそこから食べ物や飲み物を買ってきても飲み食いしているようだ。もちろん、カフェやレストランで食事をすることもできるが、階段にゆつたりと座りこんで飲み食いするのがファッションなだろう。人びとの笑いやさざめきがこぼれ、コーヒーや紅茶、スープのかがり立ちのほる大空間は、もはや単なる階段というより、ひとつのパブリックな広場として機能しているのである。

このように、世界文化博物館では、そのソフト(活動と運営)とハード(建築)の両面で、来館者一人ひとりとともに考え、ともに語らい、楽しむための場としての博物館のあり方を探るうとして

## タイ/イサンの地域博物館



ンコックから車で三時間ほど走ったところにある小さな海辺の漁村で見た地域博物館のことを思い起こしていた。イサンという名の村の一角には小学校の敷地ほどの空き地があつて、そこに木造二階建ての寺院風の博物館が建っている。教室ふたつ分ほどの展示室には、ずつと昔、難破した中国船の生き残りがこの村を開いたという言い伝えを裏付ける遺跡の写真や、そこから掘り出された中国製陶磁器の破片、村を取り巻く地勢の特徴を示す写真やグラフィック、それに仏塔や仏像の石彫レリーフなどが、整然とガラスケースに収められて展示されている。ただ、欧米や日本の博物館とひとつだけ違うのは、展示室の奥に仏像が置かれていて、地元の人びとが時折りそこにお参りに来るという点である。村の博物館は、地域の人にとってはお寺の代役も務めているのである。

外に出ると、博物館の前の広場には田舎風の食堂があつて、地元の人びとの幸を使つたおいしいタイ料理を出してくれる。観光客や村人たちが、家族やグループでやってきてはそこで食事とおしゃべりを楽しんでいくのだという。広場ではまた、時節が来ると祭りも催され、その折には村じゅうの人びとが集ってくるらしい。

タイの地域博物館は、単に知や情報を伝え広める場であるだけでなく、人びとが自分を確かめ、たがいに語らい、ふれあうための共通の場として多彩で

としてもさほどおかしくないこととなる。いずれにせよ、一方的に知を伝授しようとした近代のミュージアム像の限界を超えようとして、模索し続ける西洋の最先端のミュージアムがたどり着いた地点と、ミュージアムという近代的な装いをこらしながらも、地元の人びとと文化に深く根ざしているタイの地域博物館が佇む場は、意外なことにもそれほど離れてはいないのかもしれない。

新しい時代のミュージアムの可能性を、ほんの少しだけ垣間見たような気がした。



時論  
新論  
理想論

## 建築家の悲劇—アラブ世界の都市伝説

福田 義昭

(ふくだ よしあき)

国立民族学博物館外来研究員



スルタン・ハサン学院  
(左側建築物)



近くから撮影した  
スルタン・ハサン学院

エジプトの首都カイロは、いわゆる「イスラム建築」の宝庫である。私のお気に入りはスルタン・ハサン学院だ。四世紀、マムルーク朝時代に建てられた豪壮な宗教建築物で、カイロの南東部、サラフティーン(サラティン)が礎を築いた城塞の西向いに、それと対峙するようにして威容を誇っている。今から七〇年ほど前にエジプトを訪れた中国史家の宮崎正氏も「恐らく世界の石造建築の中で、指を第一に屈する傑作ではないかと思う」と述べている。

偉大な建物には、自然と何らかの伝説が生まれてくるらしい。スルタン・ハサンは、このような傑作が二度と造られることがないようにとその建築家の腕を切り落としてしまった、という話がある。史実には反するが、少なくとも一九世紀末頃にはすでに一部で流布していたようだ。野上弥生子など戦前にカイロを訪れた幾人かの日本人旅行者も、この話を紹介している。

アラブの古伝説が元になっているのではないか、という人もいる。イスラム以前の時代、現在のイラク南部にラフム朝というアラブ王朝があった。その国のある王が、首都の郊外にハワルナクという宮殿を建てることになる。ピザンツ出身のスイニンマルという建築家がこれを請け負い、長い年月をかけて壮麗な宮殿を完成させる。しかしその直後、王は彼を宮殿の上から突き落とし殺してしまふ。理由には三つの説がある。同様の建物を他人に建てられたくなかった、というのがひとつ。もっと素晴らしい、太陽の動きに合わせて回転する建物を造る手が届かなくて、建築家がそれをしなかつたことに対する怒り、というのがふたつ目。最後に、宮殿の前壊につながる建築上の秘

密を守るうとした、という説。

この伝説は「恩を仇で返される」という意味をもつ「スイニンマルの報酬」という諺ともなり、中東一帯に流布している。しかし、これがスルタン・ハサン学院の伝説の直接的起源かどうかは定かでない。スイニンマル伝説では建築家が殺されたのは腕を切り落とされるだけだからだ。

じつは、この種の伝説はアラブ特有のものではない。ユーラシア大陸やアフリカ大陸に広く類話が存在する。腕が切り落とされる型も少なくない。スペインの例など、スイニンマル伝説が元になったと思われのものもあるが、そうはいえないものも多い。古代インドで生まれた仏陀の前世物語集「ジャータカ」にもすでに類話が見られ、先に挙げた最初の理由により、建築家の目がえぐりとられることになっている。

エジプトに話を戻すと、より最近の建物に関しても類話が見つかる。二〇世紀初頭のカイロ近郊に、ベルギー人実業家のアンパン男爵がヘリオポリスという街を造り、そこに自分の住居を建てた。男爵宮殿とよばれる、この奇怪な建物にも同様の話が流布していることを街の住人から聞いたことがある。面白いことに、太陽の動きに合わせて回転する建物というモチーフのみが見られ、建築家の受難には触れない型もある。

ほとんどの類話で建築家がよそ者になつていく点も興味深い。カストン・ルーによる有名な「オペラ座の怪人」(一九一〇)の原作でも、エリックの前半生が語られるエピソードに同様の状況を見出すことができるとも、このための伝説には、建築家と権力の関係だけでなく、建築家の異人性についても思考を促すところがあるように思われる。



## 津波が残した亀裂

小河 久志

(おがわ ひさし)

総合研究大学院大学文化科学研究科



政府からの支援米の支給風景。  
村人はさまざまな個人、組織から支援を受けている



村の船の大半が停泊する運河。  
津波はこの運河にも入り込み漁船や漁具、  
家屋に大きな被害を与えた



津波で破損した船を修理する村人。  
こうした光景は村の名所で見られる

被災者支援金の行方

未曾有の被害をもたらしたスマトラ島沖地震津波から一年近くが過ぎた。乾季に入ったタイ南部トラン県の漁村M村は、まさに今がかきいれ時。村人は津波などなかつたかのようにせわしくなく漁に動んでいる。津波直後は多くの船や漁具が破損し、果たして漁業を再開できるのか?と危惧したことが嘘のようだ。だが着実に進む復興の裏で、津波が村人のあいだに生んだしこりは未だに残っている。

このしこりは、被災者支援金の不平等な分配から生まれた。タイ政府は津波後、被害を受けた漁家一帯につき支援金二〇〇万バツの支給を決定し、村長が分配役を務めることになった。だが、私がお世話になつて居るR氏一家や近隣村にはいつまでも届かない。隣村ではもう支給されたついでに「おかしい」。誰もが不審に思った矢先、M村の村長を兼任する区長(複数の村から構成される区)の長)による支援金着服の事実が発覚した。彼は親族を中心とする自分に近い人間にだけ支援金を支払い、残額を着服したので。当然、支援金にありつけない村人は区長宅へ大挙、抗議に行くが、肝心の本人は第二妻の住む町へ逃げてしまったあと、その後数ヶ月の間、彼を村で見かけることはなかった。

区長派VS反対派

区長の不正に対してある者は郡役場、ある者は警察へと赴き彼を処罰するよう訴えた。しかし彼らは、曖昧な返事をするだけで一向に聞き入れてくれない。区長は

彼らと懇ろな関係にあるため、不正が黙殺されたというわけだ。こうなると、もはや彼らに打つ術は残されていなかった。かくして怒りの矛先は、区長から支援金を得た村人に向けられることになる。それまで仲の良かった者たちが急に顔を聞かなくなるなど、村が次第に「区長派」と「反区長派」に分化し始めた。結果私まで「お前はどっち派だ?」と尋ねられる始末。この対立が最高潮に達したのが七月末におこなわれた村長選挙だった。今まで対抗馬のなかつた村長選挙に反対派が対立候補を擁立したのだ。さすがの区長も焦つたのか、六月に入ると村に顔を出し始め、豊富な資金を元に選挙活動と称する宴会を頻繁に開催した。その結果、辛くも再選した。だが一ヶ月後、再び彼らにリベンジの機会が訪れる。それは八月末の区長選挙。区内の村長のなかから一名が区長に選ばれるのだが、この時はM村村長を含む三名が立候補した。そこで反対派は団結し、区内に住む親戚、知人宅を精力的に訪れ、候補者に投票するように訴えた。区長の不正は既に区内に知れ渡つてきたこともあり、最終的に彼はその地位を追われることになった。

両派の勝負は今のところ「おあいこ」。しかし依然として区長の不正は、解決されぬままだ。また彼は、区長ではないが今後四年間、村長であり続ける。反対派はリコールという手段を用いても彼に対抗するかもしれない。津波災害支援の前には見られなかつた派閥とその対立は、今後とも維持されていくことだろう。M村の「完全な」復興は、当分先のこのようにだ。



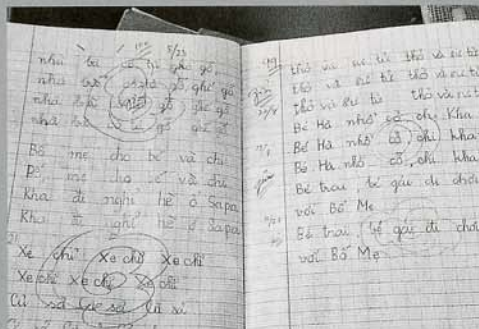
授業中おとなしい子どもたちが、休憩になると普段の元気をとりもどす



おやつのはじめは貴重な情報交換の場でもある。正面中央が西山さん



母親全員が参加するベトナム語教室は、授業も共同作業である



宿題は、授業中別の母親がチェックする。子どもたちに声調記号はむずかしいようだ

# 外国人 と生きる

## ベトナム語の架け橋として

庄司 博史  
(しょうじ ひろし)

民族社会研究部

毎月第二、第三日曜日に開催されるベトナム語教室はもう三年目をむかえた。当時四家族の子ども六人を相手におそろおそろはじめた教室も今では二〇人近くまで増え、学力に応じたクラスを設けるまでになった。とびかうのはベトナム語のみ、日本にいることをしばし忘れるほどだ。藤沢市善行でこのベトナム語教室をはじめたのは西山さんだった。ベトナム語教師の経験もなく、教材も手作り、ほとんどゼロからの出発であった。

じつは西山さん自身もベトナム人である。本名はファン・ティ・タン・ツイ。一九八〇年代後半、先にベトナムからインドシナ難民としてやってきた父親の許に家族とともに合流した。来日した当時、すでに中学三年生であった彼女にとって日本語を身につけるのは並大抵のことではなかった。日本の中学一年に編入したが、定住促進センターで三カ月学んだ日本語はやつと挨拶程度で、授業はまったく理解できなかった。三年間は日本語の獲得のため全力を費やした。先生や友人の協力も忘れられない。おかげでまったく自力で京都のカトリック系高校に入学できた。その後、看護学校で准看護師の資格をとり、関東の病院で日本人とまじりて働いてきた。

しかし、すべてのベトナム人が彼女のようには日本社会に受け入れられ、また十分に能力を発揮できる場を見付けているわけではない。特に成人としてやってきた人にとって、日本語の能力不足が原因で、ベトナムで養った知識や技術を日本で生かすことは何年たっても最大の難関である。また日本の文字がわからないため、役所

での手続きや子どもが学校から持ち帰る通知の理解に不自由している人も決して少なくない。一方、日本で生まれた子どもたちにとって、次第にベトナム語は外国語になりつつある。そのため日本語の不自由な両親とはコミュニケーションが十分成り立たないケースさえある。

現在日本には約二万六〇〇〇人のベトナム人がいる。そのうち約三分の一が、かつてインドシナ難民として来日した人びとと、その呼び寄せ家族である。彼らの多くは、関東から東海、そして関西のいくつかの都市に数百人の単位で比較的多く暮らしている。慣れないことばかり来る不自由さと情報不足を補いあい、かきられた余暇を仲間同士で過ごすため、職場や公営住宅を中心にベトナム人が集まる。小さなベトナム人コミュニティがそそぎを支えてきた。

とはいえ、日本での生活も二五年あまり経過し、ベトナム人コミュニティも少しずつ変化している。若い人びとの多くは日本語になじみ、生活の根を日本社会に活躍している人もめずらしくない。日本で生まれたベトナム人二世も成人して家庭を築きつつある。西山さんのように日本名をもち日本国籍を取得した人がすでに数百人にも達している。日本社会に時折見られる外国人差別ももちろん理由のひとつだが、一方でグローバル化のなかで本国や故郷との結び付きを保てる安心感が決断を支えた面もある。

しかし国籍を取得し、日本名をもった今も、こまやかな習慣、考え方までまったく日本人になりきろうとは、西山さんは

思っていない。人間関係のすざんだ日本でベトナム人家族や友人の絆はかえがたいものだ。今の日本人にはついていけないところも多い。そして、なにより子どもたちが伝えたいのがベトナム語である。日本語はうまくてもないが、ベトナム語も子どもたちにとって大切なことだ。故郷や家族との絆を保つうえで不可欠だし、ベトナムとの交流が活発化するなか、ベトナム語は将来きつと役立つだろう。この国でも外国人にとつて、ふたつのことは、ちよつとした運命でもあり、可能性でもある。そして、ことばの大切さはなによりも自分たちが経験してきたことだ。しかし日本には外国人に出身国のことばの教育を保障する制度はない。

西山さんが三年前ベトナム語教室をはじめたのは自分の二人の子供にベトナム語を教えようとしたのがきっかけであった。かつて、ボランティアとしてベトナム語教室や保育活動に参加した経験をもとに、自分で公民館の一室を借り友人に呼びかけてはじめた手作りの教室だった。すべての母親が授業や宿題点検に参加するのは今も変わらないが、あとの懇談会は貴重な情報交換の場となった。

今、日本では多文化共生ということばがはやっている。自分たちのように、ベトナム人としてこぼと誇りを保ちながら日本に将来を託そうとする人びとを日本社会は受け入れるのだろうか。「ベトナム系日本人」と堂々と名乗れる日が来るのだろうか。それに賭けた自分たちに日本社会が出す答えを密かに西山さんは待っている。



# 地域研究企画交流センターの 組織再編にあたって



## 地域研究企画交流センター

- 押川 文子 (おしかわ ぶんこ) 南アジア地域研究
- ウィル・デ・ヨン ポリティカル・エコロジー論
- 阿部 健一 (あべ けんいち) 東南アジア地域研究、生態史
- 村上 勇介 (むらかみ ゆうすけ) ラテン・アメリカ地域研究、政治
- 帯谷 知可 (おびや ちか) 中央アジア地域研究、現代史
- 山本 博之 (やまもと ひろゆき) 東南アジア地域研究、現代史
- 石井 正子 (いしい まさこ) 東南アジア地域研究、社会学
- 篠原 拓嗣 (しのはら たくし) 情報学
- 小森 宏美 (こもり ひろみ) 北欧地域研究、現代史

国立民族学博物館地域研究企画交流センター(地域研)は、本年三月末をもって廃止され、現教員は全員四月に京都大学に移り、京都大学から加わる研究者とともに全国共同利用施設(試行)「京都大学地域研究統合情報センター」(京大地域研)を新設することになりました。「民博地域研」として活動した一一年一〇カ月の間に賜りましたご協力とご支援に、あらためて厚く御礼申し上げます。

地域研は、一九九四年六月、世界各地を対象とする大規模な地域研究機関の設置をもとめる研究者の長年の努力をもとに、その段階的・暫定的措置として国立民族学博物館に附置する形態で設置されました。定員一〇名の小規模な研究組織でありましたが、設置以来、民博というまたとなしすばらしい研究環境のもとで、「世界研究としての地域研究」という設置理念に沿った研究活動をおこなってまいりました。地域研究のネットワーク構築を目標に、地域研究に関連する諸分野の研究者の協力を得つつ、毎年度一五本程度の連携・共同研究、三件の国際シンポジウム、国際共同研究(ヘルププロジェクト)、機関誌「地域研究」の刊行などを通じて、幅広い地域研究の内外の交流を実現してきたと自負しています。また、全国の地域研究に関わる多くの組織とともに、地域研究の全国的ネットワーク「地域研究コンソーシアム」を結成し、立ち上げ期の事務局として役割を果たしたことは、地域研教員一同にとって大きな喜びでした。こうした地域研の活動は、「みんなく」の豊かな研究基盤と研究者仲間たちとの交流、そして事務部門の支援があったこそ実現されてきたものでした。とりわけ

民博の伝統である自由闊達な研究風土や、博物館をもつ研究機関として社会に開かれた活動形態は、私たちが新しい地域研究のあり方や研究システムを考えるうえでかけがえのない糧になりました。しかし、活動が拡大するにつれて、規模の問題、そして学問分野横断的な地域研究組織を、文化人類学の先端的研究機関である国立民族学博物館に置くことの難しさも明らかになり、今回の組織再編に至りました。

同時に、今回の組織再編は、グローバル化のなかで世界各地がつかつてないほど緊密に連関しあう今日の状況に対応し、地域研究を構築してきた地域研究者の選択でもあります。新設された京大地域研では、地域間の相互関連を重視する地域研究をこれまで以上に強力に推進するほか、多様な形態をとる地域研究情報の即時的共有化や地域情報学の構築など、世界各地への理解を深めるための基盤であります。民博地域研として展開してきた研究活動やコンソーシアム事務局としての機能も、若干の再編をおこなったうえで、京大地域研が継承します。

地域研にとって、組織再編は、新しい出発です。「民博地域研」として蓄積してきた研究と活動経験を土台として、京都大学から加わる新しい同僚とともにあらたな決意をもって、地域研究の推進とネットワークの構築に取り組み所存です。

「民博地域研」から「京大地域研」へと組織は変わりますが、今後とも引き続きご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(押川 文子)

# みんなくを離れるにあたって

## 民族学から観光文明学へ

石森 秀三  
(いしもり しゅうぞう)



北海道大学  
観光学高等研究センター

甲南大学経済学部卒業。ニュージーランド・オークランド大学大学院に留学後、京都大学人文科学研究所研究員を経て、1975年に民博に着任。放送大学客員教授。ミクロネシアでフィールドワークをおこなった後、世界各地で観光に関する調査をおこなう。専門分野は、観光文明学、文化開発論、博物館学。観光立国懇談会委員、国土審議会専門委員、文化審議会専門委員などを歴任。「危機のコスモロジー」(福武書店、1985)で大平正芳記念賞受賞。著書・編著書に「観光の20世紀」(ドメス出版、1996)、「博物館概論」(放送大学教育振興会、2003)など多数。

ミクロネシア・サタウル島 1978年(須藤健一撮影)



私は今から二八年前に、ミクロネシアのサタウル島でフィールドワークをおこなった。そのときに、幾人かの幼児が激しいひきつけを起こして、高熱をだし、死に至ることがあった。見舞いに行くところの病気が何か知っているか、「何かよい薬をもっていないか」などと問いかけられた。いつも島の人たちにお世話になるばかりだったので、何かお返ししたいと思っただが、医学の素養のない私は何もしてあげられなかった。

そのときに、民族学者とは一体何者か、とつくづく考えさせられた。死にゆく幼い子どもを命すら救えないような学問に価値があるのだろうかと思いついた。近代文明から隔絶された絶海の孤島という極限状態のなかで思いつめたとはいえず、島の人びとの世話になるばかりの自分に対して恥ずかしい気持ちではないだろうか。民族学はある社会的財産を収奪するだけで、何もお返しができない学問ではないかという懐疑も生じた。

世話になったサタウル島の人びとに対するせめてものお返しの意味を込めて、共同調査者であった秋道智彌氏(現総合地球環境学研究所教授)と須藤健一氏(現神戸大学教授)らと一緒に「サタウル語・英語辞典」の編纂プロジェクトを立ち上げた。編纂作業は順調に進んだが、言語学者による最終チェックが完了していないために、まだ刊行に至っていない。私自身の言語学の素養が乏しいために長らく悩み続けてきたが、昨年、オセアニア言語学を専門とする菊澤律子さんが民博助教授として着任され、辞典編纂プロジェクトに加わっていただけたので、大きく前進している。平成一八年度内に辞典出版のめどがたったので、嬉しく思っている。

私は二〇年ほど前に、諸般の事情から「観

光学」にシフトした。当時の観光学は観光事業論やホテル経営論など供給サイドに立脚した実学志向のために、学界のなかでは不当に軽視されていた。私は観光学に新しい息吹を吹き込むために、「観光革命」「観光ビッグバン」「文明の磁力」「自律的観光」「観光文明学」など、新しいコンセプトを提起し続けた。

さらに、二〇〇三年には小泉首相の発議で立ち上げられた観光立国懇談会のメンバーとして首相官邸に何度も出かけて、観光立国政策の基本方向について諸提言をおこなった。日本では長らく、観光は国家の課題とみなされていなかったが、国家政策の大きな転換点に立ちあえたのは幸運であった。

二〇世紀には軍事力や生産力などのハードパワーが他国に威力を与える源泉であったが、二一世紀には知力や文化力や情報力などのソフト・パワーが他国に影響を与える源泉になる。今後、日本が観光立国を推進し、そのソフト・パワーの強化力を入れていけば、世界のなかで独自のプレゼンスを示すことが可能になる。

また、観光立国は美しい日本の再生や地域の活性化にもつながるものである。

北海道大学は今春四月をもって「観光学高等研究センター」の新設を決定し、私にセンター長としての就任要請をおこなった。来春四月には観光学の大学院を設置する計画なので、喜んでお引き受けした。

「熟年よ、大志を抱け」の心算で、今年四月から北の新天地で観光学の高等研究、教育拠点の確立をめざして、仕事を進めている。最後に、新しい学問分野へのチャレンジを許容してくれた民博に対して感謝の意を表したい。

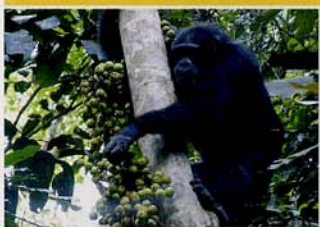


ボツソウ村の目抜き通りから見た、チンパンジーが生息する真山



村落の周辺部までやってきてパイパイを食べるチンパンジー

道路を横断するチンパンジーと道を譲る村人



好物のイチジクの実を食べるチンパンジー



### チンパンジー

(学名: *Pan troglodytes*)

ヒト科。アフリカ大陸の熱帯林地帯を中心に分布する。近年、個体数減少が著しいとされ、IUCN(国際自然保護連合)のレッドリスト(2004年)で絶滅危惧IB類に分類されている。進化史上ヒトにもっとも近縁な現生種であり、約400~700万年前に共通祖先から分岐したと考えられている。かつてはゴリラ・オランウータンなどとともにおらんウータン科に分類されていたが、近年の遺伝的距離を重視した分類では、ヒト科とされる。成熟果実を中心とした雑食性で、サル類の狩猟による肉食や、道具を用いた昆虫食が知られている。

## 生きもの

### 博物誌

【チンパンジー／ギニア】

## ヒトとチンパンジーの差は数パーセント

### 山越 言

(やまこし げん)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授

## チンパンジーは進化の隣人

チンパンジーという動物について、どのような印象をおもちだろうか。ソウヤキリンのような圧倒的な存在感をもつわけではなく、バンダヤシマウマのような美しさからもほど遠い。しかしながら、チンパンジーは、現生のすべての動物のなかで、進化的にヒトにもっとも近縁であるという、圧倒的にユニークな特徴をもっている。

野生チンパンジーの行動・生態研究によって、道具の使用や狩猟行動、「政治的」な順位争いといった、さまざまな「人間的」な姿が明らかになってきた。昨年、ヒトと数パーセントの違いしかないといわれてきたチンパンジーのゲノム(※1)が解読された。すでに終了しているヒトゲノムとの比較によって、約四〇〇〜七〇〇万年前に両種が分岐し、違いを見せることになった進化的要因についての分析が期待されている。チンパンジーが「進化の隣人」にもよばれる所以である。

遺伝的・生理的にヒトに近いチンパンジーは、エイズや肝炎研究のための貴重な医学実験動物として使用されてきた。反面、チンパンジーのような「人間的」な存在を「監視し」、「虐待」することへの批判も強い。「動物の権利」運動の文脈の中で、高度な知的能力をもつチンパンジーには、「人権」を認めるべきだという主張もある。このように、現代社会においてチンパンジーは、ヒトと動物の境界に位置する多義的な存在となっている。

### 祖先が姿を変えたもの

ところで、西アフリカ・ギニア共和国の片隅に「進化の隣人」であるチンパンジ

ーと人びとが、文字どおり「隣人」関係にある村がある。ギニア南部の森林地域に位置するボツソウ村では、村の裏山にあたる小さな丘に、ひと群れのチンパンジーが生息しており、村人たちによって手厚く保護されてきた。生息地である丘は、村人にとつての神聖な場所であり、日常的な立ち入りや樹木の伐採が固く禁じられている。通過儀礼などのさまざまな儀礼の場であり、精霊の住まう森でもある。このため、丘の中腹より上は直径一メートルを超す巨木が林立し、チンパンジーにとっては格好のすみかとなっている。進化とも動物の権利とも無縁なこの村で、チンパンジーはどのような存在なのだろうか。この村では、チンパンジーは村を創立した氏族のトテム動物(※2)であるため、殺したり、食べることが禁止されている。村人は言う。また、今は野生動物のように見えるチンパンジーは、かつて村人の先祖にあたる人びとが、姿を変えたものであるとも言っている。これもチンパンジーはヒトと動物の境界をさまざまに存在であるようだ。

この村では一九六〇年代よりチンパンジーの生物学的研究が盛んにおこなわれてきた。近年ではチンパンジーを見にやってくる観光客の数も急増している。このような動きのなか、人からの感染が疑われる呼吸器系疾患によりチンパンジーの数が激減し、現在その存続が危ぶまれている。村人と私たち研究者は、ボツソウのチンパンジー保全のため、「われわれの祖先を守る」というスローガンの下、協力して活動している。チャールズ・ダーウィン博士に聞かせたら、なんと言うだろうか。

(※1)細胞に含まれる染色体の一組  
(※2)氏族と象徴的な関係で結びつけられている動物



# グトウの夜に

大川 謙作

(おおかわ けんさく)

東京大学東洋文化研究所助手

フィールドで  
考える

## 二八日の翌日が三〇日!?

「グトウの夜には、せひうちに来てくださいね。」

そう誘われたとき、すでに別の家のグトウに招待されていたはくは、せっかくの招待を断るのが惜しくて一瞬言葉に詰まった。だから、西暦で二月八日ですと言われ、おかしいなと思いましたが、嬉しかった。もうひとつの招待の日は、二月七日だったからだ。これならふたつの家のグトウを体験することができる。

グトウはチベット暦新年直前の一大イベントといつてよい。チベット暦の二月二十九日におこなわれることになっている。チベット暦の二月は三〇日までなので、正月の二日前にあたる。この日チベットの人たちは家の大掃除をし、夜にはグトウという特別のうどんを食べ、家から鬼を追い出し、外では爆竹を鳴らして旧年の厄を祓う。

ではなぜ今回はグトウの日が二回あるのだろうか? 答えはチベット暦と関係しているようだった。その年のチベット暦新年は西暦で二月九日だったので、本来なら二月七日がグトウの日となる。だが、このチベット暦なるも、西暦とは随分違う独自の暦算のロジックによって算出される。縁起の悪い日はとばしてしまったり、逆に同じ日や同じ月が二度続くこともある。そして偶然にも、ほくが招待された年のチベット暦二月は、二八日の翌日が三〇日になっていた。つまりグトウ

ウの日である二十九日が存在しなかったのだ。チベットの人たちも大いに迷ったようだが、二八日にやることもあれば三〇日にやることもある、という風に各自勝手に日を決めていた。

## 儀礼途中の携帯電話

チベット暦の二八日、最初に招待してくれた家にまず伺うことにした。夕方着いたときには、家はびかびかに掃除されており、新年のための飾りもだいぶ完成しているようだった。招待してくれた家のお父さんが麵粉をこね始める。ほくも教えてもらって、一緒に麵を作る。ついにお父さんは、同じ生地を使って夜の厄祓いに使う人形を作り始めた。両親に子どもが二人、それからほくたち客人の六体分だ。できあがった人形を体にこすりつけ、口元にもっていつてつばを吐きかける。これで旧年の厄が人形に移された。後は松明をたいて家の鬼を追い出し、人形をグトウの食べ残しとともに、三叉路に捨てればいいのだ。

ちょうどそのとき、ほくの携帯電話がなった。チベットといつてもラサは大都会。携帯からは学生でももっている。電話の内容は、翌日招待してくれていた家から、グトウを今夜やることに変更したということだった。ほくはそちらには何えなくなってしまった。理由は聞いたけど、きちんと教えてはくれなかった。仕方なく最初の家でグトウを食べ始める。グトウに

はちよつとした仕掛けがあつて、ニョッキのような麵のほかに、同じ生地から作った団子が一人一個ずつスープのなかに浮かんでいる。この団子の中身は、唐辛子だったり炭だつたり茶碗のかけらだつたりする。唐辛子だつたらその人は「口が辛い」、「つまり「口が悪い」、炭が出てきたらその人は「腹黒い」などなど、いろいろな意味のものや悪い意味のものがあり、家族でお互いに何が出てきたか冷やかしかしいながら大笑いする。楽しい演出といつた感じだ。食後、鬼祓いの爆竹のなか、表の通りに身代わりの人形を捨てに出る。ほくも付いていったが、爆竹の直撃を耳に受けてしまつて閉口した。そうして騒がしい夜は終わった。でもグトウの日付が変わつた理由はちよつとした疑問として残つた。ほくだけでなく、多くの友人が「明日やるつもりだったのだけど、急に親戚から電話がかかつてきて、何が何でもグトウは今日やらないといけない」と言われたと教えてくれた。彼らにも理由はわからないうつた。

## ダライラマの「魂の日」

事情の大半は後日判明した。チベットの暦学と占星学によると、人はすべて「魂の日」をもつのだが、キャンセルされたチベット暦二月三〇日は、折悪しく、遠くインドに亡命しているチベット仏教の最高指導者、ダライラマの「魂の日」であつたといつた。ダライラマの「魂」を祓う

ことは不吉なことであるので、今年のグトウはチベット暦三〇日ではなくその前日の二八日におこなうべし、との見解がインドで表明されたらしい。その見解はさまざまルートを経てチベットに達した。一方、じつはラサ市の政府はグトウをチベット暦三〇日におこなうよう指導をしていたらしい。二八日の朝には市内の社区組合がその日のグトウを禁止する指令をもつて音戸を訪問してまわつた。だが、その指導は無視され、ラサ市内のグトウは二八日にほぼ統一されておこなわれた。年中行事の調査は難しい。聞き書きや文献によつて大体の事実関係は把握できるけれども、行事の裏舞台まで知りえるわけではない。にぎやかで平和なグトウの夜に、当事者であるチベット人たちの大多数にも知られないまま、きな臭い闘いが繰り広げられていたのだ。ダライラマをめぐる政治の暗い影がチベットを覆つていて、年中行事でさえそうした政治経済の状況の知識なしには理解できないといふことが、研究者にとつての教訓になるのかもしれない。でもそのような理解はどこかほくの体験と食い違つているように思つた。結局のところ、多くのチベット人はそうした政治状況には無頓着であつた。むしろ、あの夜の少しばかり特別な雰囲気こそがグトウの本質であつたのかもしれない。グトウの夜には、中国化以前から、チベット人たちは楽しい団樂の温もりと祭りの夜の高揚とともに、鬼祓いの緊張をも味わつてきたのだから。



身代わりの人形を入れた箱。食後にグトウの食べ残しをこの箱に入れて表の三叉路に捨てに行く

身代わりの人形はどこかユーモラス。貝殻型の、ちよつとニョッキに似たものがグトウの團。団子の中には塩や茶碗のかけらがすでに仕込まれている

グトウの團と具をつめる団子を作り始める。階下の台所では母親がスープを作っている

グトウ近影。停電のためにうまく撮れていないのが残念

「あたり!」というわけではないけど、グトウの団子からなにかいいものが出てきたのだから



## 編 集 後 記

4月から、地域研究企画交流センターの組織再編にともない民博の教員数が約10名減りました。地域研と同様に民博にとっても、現体制であらたな時代をどのように乗り越えていくのか、新しい出発のように思います。

今年『月刊みんぱく』は、30巻、30周年を迎えています。館内では、『月刊みんぱく』をどのように育てていったらよいのか、さまざまな意見があります。民博から社会にどのようなことを発信できるのか。『月刊みんぱく』の新しい形を模索していかなければなりません。この4月号から制作会社が変わって、思い切ってデザインを一新しました。その過程で制作会社とのあいだで雑誌に対する「常識」のズレを強く感じました。内容よりもまずデザインが重視される出版業界のなかでは、『月刊みんぱく』のような地味な雑誌にも希少価値があるのだと、再認識した幸いです。

グローバル化のすすむ世界の動向に対応して、今月号からシリーズ「外国人として生きる」がスタートしました。どうぞ御期待下さい。（池谷和信）